



習近平の人脈

李, 昊

(Citation)

国際文化学研究 : 神戸大学大学院国際文化学研究科紀要, 60:1*-30*

(Issue Date)

2023-11

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100485327>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100485327>



習近平の人脈

李 昊

はじめに

今日の中国において、中国共産党中央委員会総書記の習近平が圧倒的な権力を手中に収めていることについては、もはや疑問を挟む余地はない。政権発足直後から始められた反腐敗運動、二〇一六年の党中央の「核心」としての地位の獲得、二〇一七年の第十九回党大会における人事の勝利、二〇一八年の国家主席任期制限撤廃、二〇二一年の「歴史決議」の採択と、その権力と権威は強化され続けてきた。二〇二二年の第二十回党大会では、総書記に留任し、異例の三期目政権に入った。習近平は、自らの統治を「新時代」と位置付け、毛沢東や鄧小平に並ぶ指導者として自己アピールをしている。

かつてメディアを賑わせた江沢民の「上海閥」や胡錦濤の「共青团派」はもはや言及されることもほとんどなくなつた。江沢民は二〇二二年一月末に死去し、上海閥はもはや存在しない。胡錦濤は二〇一二年の引退以来、ほとんど政治に介入することがなく、その人脈の共青团派も徐々に存在感を失っていった。二〇二二年の党大会において、李克強総理が定年とされていた六十八歳に満たないにもかかわらず引退し、かつてポスト習近平の有力候補と見做されていた胡春華副総理は中央委員に選出されたものの、政治局委員からははずれ、翌年三月に実権に乏しい人民政治協商会議の副主席に転出した。両者は共産主義青年団出身であり、胡錦濤と緊密な関係にあることが広く知られていたが、李克強は二〇二三年一〇月に急死し、胡春華ももはやほとんど政治的な影響力は持っていないと思われる。

もはや党内には、習近平に対抗できるまとまった勢力はない。第一期・第二期政権において、習近平は自らの仲間の助けを得て、権力の強化に邁進した。二〇二二年の党大会で新たに選出された最高指導部たる政治局常務委員会は習近平に忠誠を誓う人物で固められ、政治局委員の二十四人も大半は習近平に近い人物によって占められた。人事面において、習近平は完勝を遂げ、盤石な体制を確立した。

政治において、人事の重要性は言うまでもない。いかなる政治社会においても、思い通りの政治を行うためには協力者が必要である。重要な役職を協力者で固めればそれだけ意向を政治に反映させやすい。習近平の権力掌握過程もそのような習近平の協力者たちの支持によって進められた。本稿では、習近平の人脈に注目し、その権力掌握過程において、習近平がどのような人物によって支えられてきたかについて検討する。そして、第一期から第三期政権にかけて、その権力基盤の変質が進んでいることを論じ、それが習近平政権のリスクにもなりうることを指摘する。本稿は派閥、人脈の観点から習近平の権力強化過程を分析するものである。

一、習近平人脈の諸系統

中国の政治エリートは党と国家機構が密に癒着した巨大な官僚機構の中で、数年おきの異動を繰り返しながら昇進していく。その過程で、さまざまな部門で勤務し、出会いを得て、人脈を広げていく。それがやがて派閥となり、権力基盤となる⁽¹⁾。

中国において派閥を表す言葉として「派系」が用いられることが多い。中国国民党の派閥を研究した田弘茂や金以林は「派系」は「派」と「系」に分けることができると指摘する⁽²⁾。「派」は派閥をさし、それはいくつかの「系」、すなわち派閥の内部の系統に分けることができるという。このような見方は、派閥が組織化されずに人脈の集まりという形をとる中国において、妥当であるといえる。例えば、二〇一四年に失脚した周永康（元政治局常務委員）の人脈は、石油系、四川系、政法系から構成される。元総書記の江沢民は上海を権力基盤として、その派閥は上海閥と呼

ばれる。しかし、江沢民は第一機械工業部でのキャリアも長く、そこで培われた人脈も重要であった。江沢民の次の総書記である胡錦濤はかつて第一書記を務めた共産主義青年団を中心に人脈を築いた。

習近平は中国の指導者の中でも、多様な人脈を持つ人物である。習近平は、一九七九年から一九八二年まで、中央軍事委員会弁公庁において耿飈（副総理、中央軍事委員会秘書長）の秘書を務め、それ以後、河北省、福建省、浙江省、上海市と二十五年に及ぶ地方勤務を経て、二〇〇七年に最高指導部入りを果たした。こうした各勤務地で培った人脈はもちろんのこと、それ以前の清華大学における友人や、文化大革命中に下放された陝西省延安で共に過ごした友人なども習近平の人脈の一部として動員されてきた。本稿では、習近平の人脈を八つの系統に分類し、縁故を得た時系列に沿って、それぞれの系統の主要人物や特徴について整理する。

紅二代

習近平が二〇〇七年の第十七回党大会で政治局常務委員に抜擢されたとき、いわゆる「太子党」の代表格として紹介されることが多かった⁽³⁾。太子党とは、共産党の高級幹部、特に共産党政権を打ち立てた革命家たちの子弟のことを指す。習近平はかつて副総理を務めた習仲勲の息子である。習近平が最高指導部入りした頃、多くのメディアや研究者は、太子党を一つの派閥と捉え、習近平をその筆頭とした。しかし、太子党に派閥としての実態はない。当然のことではあるが、革命家の子弟であることをもって、二者が緊密な関係にあると断定することは不可能である。かつて習近平と薄熙来（薄一波元副総理の息子）が競争関係にあったことは広く知られている。

当の革命家の子弟たちは、太子党という呼称の派閥的な含意を嫌って、革命第二世代という意味の「紅二代」を自称する。紅二代であることは、派閥の存在を必ず意味するわけではないものの、共通の家庭背景が、縁故の基礎となることも事実である。建国以来、高級幹部たちは集住し、その子弟たちは幼馴染として近所で共に育ち、学友でもあった。幼年期より交流を持ち、それがやがて政治的な紐帯にもなった。ただし、紅二代はその特権的地位に比して、必

ずしも権力の中枢において重要な地位を占めてこなかった。シーは彼らが系統的に権力から排除されてきたとさえ論じている⁽⁴⁾。習近平もまた必ずしも紅二代の人脈を重用してこなかった。

習近平の紅二代人脈の中で、最も言及に値するのは、劉源である。劉源は劉少奇元国家主席の息子である。劉少奇も習仲勳も文化大革命中に迫害を受け、息子である劉源と習近平は同じ境遇にあった。文化大革命後、習近平が地方勤務を続ける中、劉源は河南省での地方勤務を経て、武装警察に入り、その後二〇〇三年より軍に所属した。習近平政権発足時、兵站を司る総後勤部政治委員を務めていた。劉源は軍内の汚職腐敗取り締まりに力をいれ、総後勤部副部長だった谷俊山の摘発に貢献した⁽⁵⁾。その後習近平就任後に大々的に展開された反腐敗闘争を軍内から支えた。

従来、文民の最高指導者にとって、軍の掌握は困難な仕事だったが、習近平は軍内に強力な仲間を得て、権力の確立を進めることに成功した。劉源の活躍は目覚ましく、一時軍の指導部である中央軍事委員会に抜擢されるとの報道もあったが⁽⁶⁾、それは実現しなかった。劉源は二〇一五年に退役し、全国人民代表大会財政經濟委員会副主任委員という半引退ポストを五年務めた後、二〇二三年の春に引退した。

紅二代のうち、習近平の関係でもう一人言及すべきは、張又俠である⁽⁷⁾。張又俠はかつて一九七九年と一九八四年のヴェトナムとの軍事衝突において実戦経験を持つ。遼寧軍区司令員、総装備部長などを経て、二〇一七年の党大会後の一中全会で、人民解放軍の制服組トップである中央軍事委員会副主席の任に就いた。張又俠について、特筆すべきは、張宗遜を父に持つことである。張宗遜は人民共和国建国以前より軍で活躍した人物であり、一九七三年から一九七八年まで総後勤部長を務めていた。習近平の父親である習仲勳と張又俠の父親である張宗遜は陝西省出身の同郷であり、また、抗日戦争後の第二次国共内戦期に彭徳懐が指揮する西北野戦軍（後の第一野戦軍）でそれぞれ副政治委員、副司令員を務め、戦友でもあったことが知られている。この親同士の友情が息子たちに受け継がれている可能性は高い。張又俠は習近平に忠誠を誓う発言を繰り返しており、両者の関係が良好であることは明らかである。何より、二〇二二年の党大会において、それまで不文律とされていた六八歳定年制を破って、七十二歳の張又俠が政治局

委員に留任したことからも、習近平の信頼が見て取れる。

陝西省関係者

習近平の本籍地は陝西省富平県である。この経歴から、陝西省にゆかりがある人物が習近平人脈に数えられることが多い。ただ、習近平が実際に生まれ育ったのは北京であり、キャリアの中で陝西省に勤めたことはない。習近平と陝西省を結びつけるのは、下放の経験である。国内が混乱を極めた文化大革命中、都市の青年は農村に下放され、習近平は陝西省の延安に下放された。この経験は習近平にとって重要だったらしく、「陝西は根であり、延安は魂だ」と述べたこともある⁽⁸⁾。延安で出会ったのが、王岐山と王晨である。

王岐山も習近平と同じ時期に延安に下放されていた。習近平とは別の村だったが、習近平が北京から戻ってきた際に、立ち寄って一泊したというエピソードがある⁽⁹⁾。王岐山は後に姚依林（元副総理）の娘と結婚したため、太子党に数えられることも多いが、習近平との縁故は延安時代に因る。王岐山は、金融部門でのキャリアが長く、北京市長を務めた経験もある。有能な行政官として評価され、温家宝内閣では副総理を務めた。二〇一二年の党大会後に最高指導部の政治局常務委員に選出されたが、汚職腐敗の取り締まりを担う中央規律検査委員会の書記を務めることとなったのは驚きを持って受け止められた。

二〇一二年当時、中国のエリート政治をめぐるのは、江沢民の上海閥と胡錦濤の共青团派との対立と競争に関心が集中しており、その対立構図に基づいて分析が行われていた。その観点では、第十八期最高指導部七人のうち、江沢民に近いのが四人、胡錦濤に近いのが李克強一人、中立が習近平と王岐山と理解された。確かに、江沢民と胡錦濤の対立構図から見れば、それは正しいが、その後王岐山の活躍によって習近平の権力掌握が急速に進められる中で、習近平と王岐山との紐帯が徐々に知られていった。

王岐山は習近平が大々的に展開した反腐败闘争の推進を担当し、高級幹部を次から次へと摘発していった。政敵排

除に大きく貢献したのだ。習近平の第一期政権における急速な権力掌握は、王岐山の貢献なしには実現できなかっただろう。二〇一七年の党大会で中央委員会から退出した後、翌年三月に定年を超えて国家副主席に選出されるほど、習近平の信頼を得た。しかし、第二期政権の途中で、王岐山に近いとされる人物や企業が次々と摘発を受けており、習近平と王岐山の関係が悪化しているという観測が広がっている⁽¹⁰⁾。

王晨は習近平と同時期に延安に下放されたが、早くから地元延安で幹部となっていた。習近平が大学に進学するにあたって、王晨が役割を果たしたという見方もある⁽¹¹⁾。第二期政権においては、全国人民代表大会常務委員会副委員長を務めた。

清華大学関係者

習近平の古い友人たちの中で、とりわけ重要な人物の一人は、陳希である⁽¹²⁾。陳希は習近平の清華大学時代の寮のルームメイトとされる⁽¹³⁾。陳希は長らく清華大学に勤め、党関連の役職についていた。二〇〇二年から二〇〇八年までは、清華大学の党委員会書記を務めている。

重要なのは、陳希が二〇一三年以後、中央組織部に移り、常務副部長を経て、二〇一七年から二〇二三年まで中央組織部長を務めたことである。いかなる組織もそうであるように、中国共産党においても人事を司る部門は大きな権力を持つ。第一期政権において反腐敗闘争を通じて次々と政敵を排除した後、習近平はその空いたポストに自らに近い人物をつけていった。そうした人事の調整を担うのが組織部門であり、陳希は習近平の権力強化に大きく貢献した人物である。また、現在中国共産党の指導部には、陳吉寧（上海市党委員会書記）をはじめとしてかつて大学教員を務めていた専門家や清華大学にゆかりのある人物が多く、これらの人事には陳希が深く関わったものと推測される。

二〇二二年の党大会終了後、陳希は政治局委員を退任して、一般黨員となった。通常であれば、中央組織部長もすぐに交代するはずが、陳希は長らく退任せず、二〇二三年四月になってようやく李幹傑と交代した。また、二〇二三

年一月現在、陳希は依然として中央党校校長の任にある。理由は不明だが、それだけ習近平の信頼が厚いことがうかがわれる。

河北省関係者

習近平は、一九八〇年代半ばに河北省正定県の党委員会書記を務めていたが、同じ時期、隣町である無極県の党委員会書記だったのが栗戦書（前全人代常務委員会委員長）である⁽¹⁴⁾。二人は会議などで顔を合わせる機会も多く、近い年齢同士、交流があつたと言われる。栗戦書は一九八〇年代後半に河北省で共産主義青年団の省委員会書記を務めていたため、中央政治に登場した時、胡錦濤に近い人物として報じられたが⁽¹⁵⁾、河北省でのつながりが知られるにつれて、徐々に栗戦書を習近平の側近とみなす見方が広がっていった。両者の関係がいつ、どのように深まったのかは必ずしも明らかではないが、栗戦書は、二〇一二年から二〇一七年まで中央弁公庁主任を務め、習近平に大番頭として仕えた後、二〇二二年まで最高指導部の一員として習近平を支えた。二〇一八年、習近平の権力集中と権威強化に対する揺り戻しが発生した際、栗戦書は全人代常務委員長として、会議などで「習近平同志を核心とする党中央の『一錘定音、定於一尊（一発の銅鑼の音が全体のトーンを規定し、一尊を定める）』の権威を確保しなければならない」と呼びかけたことも知られている⁽¹⁶⁾。栗戦書は、十年にわたって、習近平を支えたが、二〇二二年の党大会で政治局常務委員を退任し、二〇二三年春に全人代常務委員長からも退任した。

福建省関係者

河北省に勤めた後、習近平は一九八五年から二〇〇二年まで十七年にわたって福建省に勤め、廈門市副市長、寧徳地区党委員会書記、福州市党委員会書記、福建省党委員会副書記、福建省長を歴任した。典型的な地方幹部のキャリアパスである。福建省時代の部下は習近平の人脈の中心的グループの一つである。

福建省関係者で特に重要であるのは、何立峰（國務院副総理）、王小洪（國務委員兼公安部長）である。蔡奇（中央書記処書記、中央弁公庁主任）と黄坤明（広東省党委員会書記）も福建に勤めていたが、彼らは浙江省でも習近平と一緒に仕事をしている⁽¹⁷⁾。

習近平が河北から福建の厦門に移ったとき、習近平の身の回りの世話をしたのが何立峰だったという⁽¹⁸⁾。その後、何立峰は二〇〇九年まで福建省に勤めたが、昇進のスピードは必ずしも早くはなかった。二〇〇九年以降天津に移るが、それ以降のキャリアはかなり特殊である。何立峰は習近平政権発足後の二〇一三年に五八歳で天津市政協商会議主席となり、正部級に昇進した。二〇一四年には、國務院の花形官庁である国家發展改革委員会へと移り、副主任を歴任した。二〇一八年には、全国政治協商会議副主席を兼任し、副国級に昇進した。そして、二〇二二年には政治局委員に選出され、翌年春の全人代で副総理に選出された。

中国の官僚は、職位によって定年が異なり、格が高くなればなるほど、定年が延びる。政治協商会議の幹部は通常名誉職の半引退状態のポストとされる。しかし、何立峰は定年の直前に政協のポストにつくことで定年を延長し、より実権のある役職に移ってさらに昇進を続けるという珍しいキャリアパスをたどった。これは習近平の意向が反映されていると思われる。第二期習近平政権において、習近平の視察には必ず何立峰が同行していた。側近であったことは間違いない。また、二〇二三年現在、政府や党の経済関連部門には鄭柵潔（国家發展改革委员会主任）などの厦門関係者が多く、何立峰の人脈が活かされているといえる⁽¹⁹⁾。

王小洪は習近平が福州市党委員会書記だった時期に、福州市公安局副局長を務めていた。習近平の身边警備を担当するなど⁽²⁰⁾、腹心と言ってもいい人物だ。その後、河南省、北京市と経て、二〇一六年以降は公安部に移った（北京市公安局長の役職も二〇二〇年四月まで兼任）。党大会を控えて、二〇二二年秋に公安部の党委員会書記に就任し、翌年六月に公安部長に就任した。党大会後の更なる昇進が確実視された。結果、政治局委員には昇進しなかったものの、中央書記処書記になり、二〇二三年三月には公安部長兼任で國務委員となった。公安・司法などを含む政法部門は長

らく周永康が影響力を保ち、習近平による権力掌握が遅れていた分野ともされる⁽²¹⁾。第二期習近平政権では反腐敗闘争の重点となり、次々と高級幹部が摘発された⁽²²⁾。王小洪はそうした重要でありながら掌握が難しい部門に送り込まれた人物であり、深く信頼されている。

蔡奇は習近平人脈のキーパーソンの一人だ。福建省出身であり、一九九九年まで福建省に勤めた後、浙江省に移った。習近平と知り合った経緯は必ずしもはっきりしないが、蔡奇は福建省党委員会の弁公庁に長年勤めたため、そこで同省党委員会常務委員や副書記を務めていた習近平と交流があったものと推測できる。蔡奇のキャリアアップは目覚ましいものであり、習近平の支持があったことは明らかである。二〇一四年、新設の中央国家安全委員会の弁公室副主任になり、二〇一六年には、中央委員でも中央候補委員でもない一般党員でありながら、異例の抜擢を受けて北京市長となった。二〇一七年以降は、北京のトップである党委員会書記を務めた。市内の低所得者層の強制排除を行うなど、必ずしも外部の評価は高くなく、二〇二二年の党大会前は、最高指導部の有力候補として名前が挙げられることは少なかった。しかし、結果序列五位の中央書記処筆頭書記の重要ポストを獲得した。さらに、二〇二三年三月より中央弁公庁主任を兼任したことは広く驚きを持って受け止められた。中央弁公庁は党の中央委員会の事務機構であり、主任は総書記の視察に同行する。第一期・第二期習近平政権では、栗戦書、丁薛祥と側近が主任を務めていた。従来は、中央委員、せいぜい政治局委員が務める役職だった。二〇二二年の党大会後、中央弁公庁主任の人事がなかなか発表されず、注目されていたが、異例の最高指導部メンバーである政治局常務委員の兼任となった。政治局常務委員が中央弁公庁主任を兼任するのは、文化大革命直後の汪東興にまで遡る。それほどまでに蔡奇に対する習近平の信頼が厚いといえる。

浙江省関係者

習近平は、二〇〇二年から二〇〇七年まで約五年間浙江省の党委員会書記を務めた。習近平人脈の中で最も人数が

多く、重要な地位を占めているのは浙江省関係者、すなわち「之江新軍」である。之江とは、浙江省最大の河川である钱塘江のことであり、習近平が浙江省党委員会書記在任中に『浙江日報』で連載したコラムも「之江新語」と題されている⁽²³⁾。

浙江で習近平と共に仕事をして、後に昇進した人物は多い。政治局委員の中には、李強（國務院総理）、蔡奇（中央書記処書記、中央弁公庁主任）、陳敏爾（天津市党委員会書記）、黄坤明（広東省党委員会書記）などがある。それ以外にも、夏宝龙（國務院香港マカオ事務弁公室主任）や応勇（最高人民検察院検察長）、鍾紹軍（中央軍事委員会弁公庁主任）、陳一新（国家安全部長）などが挙げられる。浙江省関係者は比較的若く、二〇一七年の党大会時に抜擢を受けたものが多い。彼らは二〇二二年の党大会でさらに昇進し、今期指導部で存在感を示している。

最も重要なのは李強である。李強は省党委員会秘書長として習近平に任せ、「習が目動かすだけで、何を求めているのか李には分かる。それほど近い間柄だった」と言われるほど、習近平との関係が深い⁽²⁴⁾。李強は浙江農業大学寧波分校で学んだ。同世代の北京大学出身の秀才である胡春華などに比べると高学歴ではないが、農業部門を中心に、浙江省内の各都市でキャリアを積んだ典型的なたき上げである。習近平との知己を得てからは、浙江省長、江蘇省党委員会書記、上海市党委員会書記と中国で最も経済が発展している長江デルタの重要地域の指導者を務め、「之江新軍」の代表格となった。二〇二二年春、コロナウイルスのオミクロン株が中国国内でも感染拡大する中、上海のロックダウンを強いられ、市民の生活と上海経済に大きな混乱を及ぼした。上海市党委員会書記だった李強は、結果として失脚することなく、秋の党大会で最高指導部入りを果たした⁽²⁵⁾。

全人代や党大会などの重要会議の際、党の最高指導部は壇上の最前列に並んで座る。李克強在任中、習近平の隣には李克強が着席していたが、十年の間で、習近平と李克強の二人が会話を交わす場面はほとんど見られなかった。一方、李強が政治局常務委員に昇進した後、習近平と李強が親しげに会話する場面が頻繁に見られ、観察者に両者の親しきを見せつけている。

陳敏爾も重要な人物である。習近平党委員会書記の下、陳敏爾は浙江省の宣伝部長を務めた。習近平の『之江新語』の連載シリーズの仕掛け人として知られる⁽²⁶⁾。二〇一二年以降、貴州省で副書記、省長、書記などを経て、二〇一七年七月に重慶市党委員会書記に移った。同年八月には、政治局常務委員への昇格が固まり、次期最高指導者に内定したと日本のメディアが報じたが⁽²⁷⁾、結果的にそれは実現しなかった。

五年間にわたって重慶で党委員会書記を務めた後、二〇二二年の党大会において、陳敏爾は政治局常務委員への昇進が叶わず、天津市党委員会書記に横滑りした。年齢を考えると、二〇二七年には依然として昇進の可能性は残るが、天津は経済の停滞が著しく、政治的業績をあげにくい地域であるため、チャンスは大きくないと言われる。重慶では十年間で薄熙来と孫政才の二人の党委員会書記が失脚した。問題の多い地域とされており、その対応に習近平の信頼する側近が送り込まれたと理解されたが、陳敏爾は習近平が満足できる成果をあげることができなかったようだ。習近平の側近と見做され、「之江新軍」の中心人物とされてきたが、存在感は急速に低下している。

他にも、鍾紹軍や陳一新など、軍、国家安全のような習近平が強い関心を持つ部門に習近平の信頼できる浙江省にゆかりをもつ追従者が配置されている。

上海市関係者

二〇〇六年秋に陳良宇上海市党委員会書記が摘発された後、二〇〇七年の春に習近平が上海に移った。習近平が上海に勤めたのは第十七回党大会前の半年しかないが、そこでも人脈を広げ、何人かの部下は昇進を続けている。代表的なのは、丁薛祥（國務院副総理）である⁽²⁸⁾。丁薛祥は習近平書記の下で上海市の秘書長を務め、二〇一三年以降は中央弁公庁に移り、習近平弁公室の主任を務めた側近中の側近である。政治局入りをした後、積極的に習近平を支え、二〇一八年には栗戦書と並んで習近平の権威強化に努めた⁽²⁹⁾。

丁薛祥は第十九期中央政治局の中でも年齢が若く、習近平との関係性から、二〇二二年に政治局常務委員への昇進

は確実視されていたが、行政経験がないため、中央書記処書記や中央規律検査委員会書記など、党務の役職に就くと予想されていた⁽³⁰⁾。しかし、大方の予想に反して、国務院副総理に抜擢された。

他には、第十九期指導部において、中央規律検査委員会副書記兼国家監察委员会主任を務めた楊曉渡も習近平の上海時代の部下である。

上海市関係者については、韓正にも言及する必要がある⁽³¹⁾。韓正は政治局常務委員として中央入りするまで一貫して江沢民の権力基盤である上海に勤めていた。かつて共青团上海市委員会書記を務めたことがあり、胡錦濤とも関係があるとも言われる。そして、習近平が上海市党委員会書記を務めていた時の上海市長でもある。韓正は江沢民、胡錦濤、習近平三代の総書記とゆかりを持つ稀有な人物である。一般的に習近平の人脈には含まれないが、習近平との関係も良好であるとされる。二〇二二年の党大会で政治局常務委員を退任したにもかかわらず、二〇二三年春の全人代で国家副主席に選出されたことからそれは明らかである。

旧南京軍区関係者

今日の中国の政治指導者の中で、習近平に際立つ特徴は、軍との関係の深さである。一九七九年に清華大学を卒業した後、社会人となった習近平の最初の職務は、国務院弁公庁、中央軍事委員会弁公庁秘書であった。より具体的には、中央軍事委員会秘書長であった耿飈の秘書であった。習近平の公式略歴には、この時期の経歴について、「現役」という記述がある。これはすなわち、軍籍を持つという意味である。習近平はそれ以後もほとんどの期間において、勤務地の軍関連の役職も兼任し、一貫して軍との関係を維持してきた⁽³²⁾。また、妻の彭麗媛も軍に所属する有名歌手であった。

習近平は、キャリアの大半を福建省、浙江省、上海市で過ごした。これら地域は、いずれも旧南京軍区（現東部戦区）の管轄内である。そのため、習近平は、軍の中でも旧南京軍区と強いつながりを持つと言われる。『朝日新聞』は、

その中でも、苗華（政治工作部主任）、戚建国（元副参謀長）、王寧（元武装警察部隊司令員）、韓衛国（元陸軍司令員）、丁来杭（元空軍司令員）などを紹介し、習近平と南京軍区出身者との繋がりを強調している⁽³³⁾。

二〇二二年の党大会後に発足した新指導部では、制服組トップの中央軍事委員会副主席に張又俠が定年を超えて留任したほか、何衛東が新たに昇格した。何衛東は苗華と同じく台湾方面を担う第三十一集團軍の出身であり、台湾方面を管轄する東部戦区（旧南京軍区）の司令官を務めた経験もある⁽³⁴⁾。このように、台湾方面に関わりを持つ将軍が多いため、新しい軍指導部が台湾シフトと言われることも多い。

その他

習近平の人脈は主に上述の八つの系統から構成される。ただ、習近平はそれら以外にも多くの追従者を得ている。過去のキャリアにおいては必ずしも直接的な上司部下関係はなかったものの、習近平が国家指導者になってから忠誠を誓った人物も少なくない。現在の最高指導部では、趙楽際、王滬寧、李希などが代表的だろう⁽³⁵⁾。政治局委員では、李鴻忠（全人代常務委員会副委員長）も早くから習近平に忠誠を誓った。彼らは習近平の権力と権威の強化に貢献してきた。

劉鶴（元副総理）は経済通であり、かつて習近平がアメリカのドニロン大統領補佐官に「彼は私にとってとても重要です」と紹介したことでも知られる⁽³⁶⁾。劉鶴と習近平が同じ中学に通ったとする見方もあるが、それは間違いである⁽³⁷⁾。両者が実際にどのようなように知り合ったのかは不明だが、劉鶴が習近平の経済ブレーンであることは専門家の共通認識である。二〇二二年の党大会で中央委員を退任し、二〇二三年の全人代で副総理からも退任したが、その後も経済や金融の分野で影響を持っているという報道がある⁽³⁸⁾。

近年、中国のエリート政治に「航空宇宙閥」、「軍工閥」が出現しているという見方もある。二十期指導部の中では、馬興瑞（新疆ウイグル自治区党委員会書記）、袁家軍（重慶市党委員会書記）、張国清（副総理）、李幹傑（中央組織部部長）

などがそれに当たる。習近平はキャリアの中で、こうした航空宇宙産業や軍事産業と特別な紐帯は有していない。これらの幹部の抜擢は、習近平の派閥としての人脈というよりも、テクノクラートとして高く評価された結果、重用されたと理解すべきである。とはいえ、習近平がそうした専門的知見を背景に持つ人物を好んで抜擢していることは事実である。

二、習近平勢力の質的变化

上述のように、習近平は多方面にわたる人脈を有し、巨大な派閥を中央に築き上げている。この多様な人脈をどのように理解すればいいだろうか。筆者は、習近平とその追従者たちの関係性に注目して、習近平を支える人脈の中心が同世代の友人からかつての部下へと徐々に推移していったことを重視する。それは習近平の政治運営にも大きな影響を及ぼすものである。

旧い友人と権力基盤の強化

二〇一二年の習近平政権発足当時、習近平は権力基盤が弱く、安定的な政権運営が難しいと思われていた。二期十年の最高指導者の定期的な交代が定着した結果、総書記が健康な状態で気力を残したまま退任するようになった。胡锦涛は江沢民の介入に悩まされ、思い通りの政治を行うことができなかった。習近平政権では、江沢民と胡锦涛の二人の元総書記が健在であり、習近平は彼らの介入に悩まされると予想された。習近平を「共産中国最弱の帝王」と呼ぶジャーナリストもいた⁽³⁹⁾。

しかし、結果的に大方の予想を裏切って、習近平は急速に権力を掌握することに成功した。第一期政権において最も重要だったのは、反腐敗闘争の成功である。習近平は就任直後の政治局集団学習会で早速「腐敗問題が深刻になれば、最終的には必然的に亡党亡国となってしまう」と腐敗に対する危機感を表した⁽⁴⁰⁾。二〇一三年一月には、「虎もハエ

も叩く」と言って反腐敗闘争の火蓋が切られた⁽⁴⁾。従来汚職腐敗を司る中央規律検査委員会はさほど活発な活動をしてきたわけではなかった。習近平はこの組織を存分に利用し、腐敗の咎で政敵を次から次に排除していった。

二〇一二年秋、総書記に就任したばかりの習近平は自らの信頼できる部下を各部門に配置するほどの権力を有しておらず、中央における人脈は限られた。その中で、旧い友人である王岐山と劉源が大活躍し、反腐敗闘争を押し進めた。党では周永康元政治局常務委員とそれに連なる石油部門、政法部門、四川省関係者が次々と摘発を受けた。軍では、胡錦濤政権の制服組トップの中央軍事委員会副主席だった徐才厚と郭伯雄の二人が摘発された。

反腐敗闘争は、単に政敵を排除したのみならず、他の政治エリートに対する「殺鶏儆猴（鶏を殺して猿に見せつける）」の威嚇効果もあった。また、失脚者の後釜には習近平に近い人物が据えられ、同時に習近平勢力の拡張も進められた。人事を司る中央組織部では趙楽際が部長を務め、清華大学のルームメイトであった陳希が二〇一三年から副部長を務めていた。彼らの役割もまた重要だった。

他に、党中央では河北省で縁故を得た栗戰書が中央弁公庁主任として習近平を支え、経済政策では劉鶴がブレインとなった。

第一期政権では、このように習近平と年齢が近い旧い友人が習近平の人脈の中心となり、権力確立に貢献した。彼らは紅二代、下放中に陝西省で出会った者大学の学友や、河北省時代の同僚などだった。

旧部下の抜擢

福建省、浙江省、上海市時代の部下たちは習近平より数歳から十歳程度若い者が多い。彼らの同世代では胡春華や孫政才のように早くから抜擢を受けて政治局入りしていた者もいたが、第一期習近平政権において、習近平に近い者たちは、多くが中央候補委員や一般黨員だった。習近平は彼らを次々に引き上げていった。上でも言及したように、典型例は蔡奇であり、一般黨員でありながら北京市長に抜擢された。習近平の秘書として、丁薛祥も二〇一三年以降

中央弁公庁副主任を務めた。

こうした旧部下は二〇一七年の党大会で一挙して政治局に昇進し、習近平は一大勢力を形成した。側近の栗戦書は最高指導部である政治局常務委員会入りを果たし、全人代常務委員長となった。政治局でみれば、党の重要部門である中央弁公庁主任を丁薛祥、中央宣伝部長を黄坤明、中央組織部長を陳希が掌握した。政府である國務院でも、劉鶴が経済・金融担当の副総理となった。重要地方の党委員会書記には、蔡奇（北京）李強（上海）、陳敏爾（重慶）などの側近が配置され、広東の李希や天津の李鴻忠も習近平とは直接的な縁故がないながらも、習近平に忠誠を誓っている人物だ。軍についても、張又俠は習近平と関係が深く、もう一人の中央軍事委員会主席であった許其亮も習近平が抜擢した人物だ。習近平の旧い部下は、それまで江沢民と胡錦濤によって育成されてきた人材をこぼろ抜きにして、急速に台頭した。

二〇一七年から二〇二二年の第二期政権においては、反腐敗闘争で中心的な役割を果たした王岐山が高齢のため政治局常務委員からは退任したものの、国家副主席に留まった。習近平と関係が深い人物で言えば、劉源のみが引退した（ただし、劉源も二〇一八年から二〇二三年まで、全人代の財政経済委員会副主任委員という半引退ポストにあった）。劉鶴や陳希など、同世代の幹部もまだ在任していた。

二〇一七年に発足した第十九期指導部では、政治局常務委員会に習近平の後継者となる人物がいなかった。二〇一八年春の全人代で、憲法の修正が行われ、国家主席の任期制限が撤廃された。この頃から習近平は二〇二二年の党大会でも留任するつもりだと広く認識された。おそらく習近平に近い者たちが次の指導部の中心になるだろうとも広く予想された。二〇二二年、果たしてその通りになった。

第三期政権における外様の重用

二〇二二年の党大会は、習近平が人事において完全勝利を遂げた大会として認識されている。最高指導部は習近平

に忠誠を誓う者によって固められ⁽⁴²⁾、政治局にも習近平と明らかに距離を置いている人物はいない。それは事実であるが、同時に習近平勢力は大きく質的に変化している。一九五三年生まれの習近平は二〇二二年の党大会時点で六十九歳であり、これまでの六八歳定年制の不文律に従えば、党大会で退任するはずだった。習近平は定年を打破して、異例の留任を果たしたものの、この定年ルールを完全撤廃することはなかった。習近平、張又俠、王毅の三つの例外を除いて、六十八歳以上の幹部は一律中央委員に再選されず、引退することとなった。習近平の友人についても、栗戰書や陳希、劉鶴など、習近平を支えた面々が退任した。習近平は、友人ではなくなかつて部下として自らを支えた幹部たちに囲まれた状態となっている。党務は蔡奇が司り、政府には、李強、丁薛祥、何立峰と自らの人脈の中心となる三つの系統をバランスよく配置した。

李強や蔡奇、丁薛祥などは地方幹部時代に部下として直接交流してきた。一緒に仕事し、視察に出かけ、食事や酒を共にしてきた。最も信頼できる者たちだろう。しかし、実はそうした習近平の信頼できる旧部下もほとんどがすでに抜擢され尽くしている。第二十期の政治局には、習近平とは必ずしも直接的な交流は深くないが、現時点では忠誠を誓っている人物が多く選出された。石泰峰（中央統一戦線工作部長）や李書磊（中央宣伝部長）は習近平が中央党校の校長だった時期に副校長を務めていたが、すでに習近平が最高指導部に入り、事実上次期総書記に内定した後だった。馬興瑞や袁家軍などのいわゆる航空宇宙系・軍工系も同様に、直接的な縁故はない。今期の指導部には明らかに習近平と距離がある人物はいないものの、習近平と直接縁故がある人数で言えば、実は第十九期指導部の方が多い。

このように、習近平の人脈はすでに動員し尽くされており、第三期の習近平政権は、側近のみならず外様を重用している、いや重用せざるを得ない状況になっている。このような状況は江沢民も同様だった。江沢民は上海を権力基盤として、その勢力は上海閥として知られていた。しかし、二〇〇六に陳良宇上海市党委員会書記が摘発され、後任には習近平が選ばれた。胡錦濤との権力闘争の中で、妥協の結果として、消去法的に選ばれた人事であり、習近平は江沢民の直属の部下ではなかったし、直接的な交流もあまりなかった。二〇一二年の党大会後に発足した第十八期指

導部も、人事が明らかになった時は江沢民の影響が残されたと広く認識されたものの、その後、江沢民の存在感は急速に低下していった。張徳江、劉雲山、張高麗などの政治局常務委員たちは、江沢民と胡錦濤の対立構図の中では、どちらかという江沢民により近いと言えたものの、習近平と対立的な関係ではなかった。習近平総書記への権力集中が進む中で、彼らが江沢民の代理人として振る舞うメリットは小さく、習近平という勝馬に乗るのが自然であった。政治エリート同士つながりは、多分に個人的な経験と交流に基づく私的な信頼関係に因る。このような信頼関係を国家指導者となった後に、年齢が大きく離れた部下と築くことは難しい。江沢民は一九八九年に上海を離れて、北京の党中央に移った。そこから二十年以上にわたって人脈を継承することは困難であった。習近平も同様の状況に直面している。

三、習近平政権が抱えるリスク

二〇二二年に発足した政治局常務委員会にも習近平の後継者となる人物はいない。習近平は二〇二七年の第二十一回党大会においても最高指導者に留任する可能性が高い。習近平政権が第三期へと入ったことに伴う最大の問題は、従来の慣習が次から次に打破され、予測可能性が急速に低下していることである。特に重要なのは、六十八歳定年という不文律の崩壊である。現時点では、習近平を含め例外は少数ではあるものの、すでに生じている。次の党大会でさらに例外が増えるのか、それともはや定年の不文律が完全に撤廃されるのかは現時点では明らかではない。一九五九年生まれの李強総理や、一九五五年生まれの蔡奇は、従来の定年ルールに従えば次の党大会後に引退する。しかし、習近平が彼らを留任させる可能性は当然考えられる。

何より重要なのは、習近平がいつまで最高指導者を務めるのかが明らかでないという問題だ。従来の二期十年という慣習をすでに打破され、定期的な権力交代は過去のものとなった。次の権力交代時期が不明であることに伴うリスクは大きい。

ここでは、エリート政治の観点から、習近平政権が抱える問題を整理する。

政策の硬直化リスク

習近平政権の下で、中国共産党政権は急速に個人支配化が進んでいる。個人支配体制の最大のリスクは、政策決定の権限が過度に個人に集中することである。政策をめぐる議論がおざなりにされ、最高指導者の誤った政策判断を糺すことが難しくなる。毛沢東時代の大躍進政策や文化大革命は個人支配体制の失敗の典型例である。

習近平政権でもそのようなリスクが顕在化している。役人たちは指示待ちし、習近平の判断なしには物事が進まないという状況が生まれている。二〇一九年末に発生した新型コロナウイルスの感染拡大に対して、二〇二〇年初、湖北省と武漢市は有効な対策をとることができなかった。一月二十日に習近平の指示が伝えられると、武漢市の都市封鎖、公共交通の停止など強制的かつ大規模な封じ込めが行われた⁽⁴³⁾。

習近平の人脈の質的变化が政策決定過程にどのような影響を与えているのかについて、断定的に論じるには情報が不足している。指導部内抵抗勢力はおらず、政策決定において習近平個人の世界観や政策選好がこれまで以上に決定的な要因となることは間違いない。王岐山や栗戦書、陳希、劉鶴などの同年代の友人が引退したことで、習近平が旧部下に囲まれ、イエスマンばかりになってしまおうというリスクが考えられる。それが正しければ、政策の硬直化リスクがこれまで以上に高まることとなる。

しかし、習近平とその追従者たちの関係性が実際にどのようなものであるかは必ずしも明らかではない。親密であるからこそ信頼しあい、部下が習近平に諫言をすることができる可能性もある。二〇二二年冬、中国は三年近くにわたって維持していたいわゆるゼロコロナ政策を突如放棄した。感染力の強いオミクロン株を封じ込めることが事実上不可能だったことに加え、経済へのダメージも大きかったことなど、この政策転換にはいくつかの要因があるものの、習近平の判断があったことは間違いない。ロイター通信は、この政策転換において、李強が決定的な役割を果た

したと報じた⁽⁴⁴⁾。他社はこの報道に追随しておらず、これが事実であるのかは不明だが、一連の政策転換において、党の序列二位の李強の役割がなかったとは考えられない。李強が習近平に政策転換を求めた可能性は十分考えられる。以上のように、第三期習近平政権において、習近平の権力集中による政策硬直化リスクは間違いなくあるものの、習近平とその旧い部下たちの信頼関係によって、それをある程度解消する可能性もあることは留意すべきである。

外様幹部への信頼不足と人事の不安定化

第二のリスクは、第三期政権において、習近平がそれまで直接的な交流が深くないいわゆる外様幹部を重用したことで、十分な信頼関係が形成されていないという問題である。典型的な事例は、中央組織部長と中央弁公庁主任の人事だ。通常党大会後すぐに交代するはずが、いずれも遅々として新しい人事が発表されず、二〇二三年春ごろになってやっと決定した。前任の陳希と丁薛祥はいずれも習近平の側近であり、信頼関係が深いのは事実だが、それを理由に人事を遅せるのは不自然である。しかも、前述したように、新しい中央弁公庁主任は蔡奇という政治局常務委員であり、この人事も異例である。中央弁公庁主任は中央委員会の日常業務を司る重要役職であり、政治局常務委員が兼任するのは明らかに負担過多である。このような立て続けの異例な人事は、習近平がごく限られた一部の部下のみを信頼していることを示す。

また、二〇二三年に秦剛國務委員兼外交部長、李尚福國務委員兼国防部長が解任されたことも、この信頼関係の問題のリスクが具現化した事例である。秦剛と李尚福は習近平の抜擢を受けて、副国級の高級幹部である國務委員に昇進したものの、わずか半年程度で地位を失った。二〇二三年一月現在、詳細な説明がなく、解任理由は推測せざるを得ないが、秦剛は不倫スキャンダルに伴う「生活作風」の問題、李尚福は武器調達に伴う汚職腐敗が原因だと報じられている⁽⁴⁵⁾。李尚福解任に関連して、夏にはロケット軍の司令員と政治委員が同時に交代し、しかも新任人事はロケット軍生え抜き以外から異動したということもあった。ロケット軍の設立は習近平主導の軍改革の目玉だったが、

そのパフォーマンスは習近平を満足させられていないようだ。

二〇二二年の党大会において、人事面で完全勝利を遂げた習近平は、自らが抜擢した外様幹部を信用できずにいる。習近平の圧倒的な権力が確立されておりながら、国家指導者に関わる人事がこのように不規則、かつ不安定な状況がすでに発生している。このような現象は、人事権が最高指導者個人に集中する個人支配体制においては往々にして発生する。これは今後の習近平政権が長期にわたって抱える大きなリスクとなるだろう。

内部分裂リスクと後継者問題

もう一つの重要なリスクは、習近平勢力で内部分裂が生じるリスクである。習近平は巨大な勢力を築き上げた。しかし、習近平の追従者たちは習近平に忠誠を誓うという点に共通性があるのみだ。現在、福建系、浙江系、上海系の三つのグループが習近平を支える中心的な勢力であるが、彼らが互いに協力的な関係にあるとは限らない。

毛沢東時代、一九五〇年代半ばには、高崗が毛沢東の意向を忖度して劉少奇批判を展開した。文化大革命中には、林彪集団と江青ら文化大革命推進勢力が対立した。これらは毛沢東に対する忠誠合戦の例である。毛沢東の権威は揺らがないものの、独裁者の存在は党内闘争の沈静化を意味しない。同じ状況が習近平勢力内で生じるリスクは十分考えられる⁽⁴⁶⁾。

また、習近平の追従者同士ではなく、習近平とその部下の間で対立が生じる可能性も考えられる。典型的なリスクは後継者問題である。定期的な権力交代という規範は放棄された。最高指導者の退任時期が不透明になることが政治エリートに与える心理的な影響も大きい。追従者らはいつ次の権力交代があるのかわからず、自分たちにチャンスがあるのかもわからない状況で習近平に仕えなければならない。一方で習近平は部下が自分の地位を取って代わろうとするという疑心暗鬼が生じるリスクが高まる。かつて毛沢東は劉少奇と林彪という二人の自らが選んだ後継者を打倒した。鄧小平も同様に、胡耀邦と趙紫陽という二人の総書記を解任した。江沢民と胡錦濤は自らの後継者を指名する

ことができなかつた。習近平の後継者問題は、今後の中国のエリート政治の最大の不確定要因となるだろう。

これまで、中国共産党は指導部に世代という考え方をとってきた。共産党政権を樹立した毛沢東を第一世代として、鄧小平は第二世代、江沢民が第三世代、胡錦濤が第四世代、そして習近平は第五世代である⁽⁴⁷⁾。習近平が二期十年で退任することを想定して、二〇二二年から二〇三二年は、第六世代が指導部を担うと考えられていた。第六世代の代表人物は、胡春華と孫政才であったが、孫政才は二〇一七年に失脚し、胡春華は二〇二二年に政治局委員から中央委員に降格となった。六十八歳定年制はもはや不確かとなったものの、年齢は依然として目安としてある程度有効である。

第七世代は一九七〇年生まれ以降の者を指す。これまでの慣習であれば、その中で優れた最高指導者候補を選抜して、二〇三二年の権力交代に備えて最高指導部で経験を積ませるはずだった。習近平の留任によって、この慣習はなくなつた。二〇二二年の党大会では、第七世代が中央委員に選出されるかどうか一つの注目点だったが、結果的に誰も中央委員には選ばれず、数人中央候補委員に選ばれるにとどまつた。二〇二三年一月現在、正部級の役職についている第七世代は李雲沢（国家金融監督管理総局長）と阿東（共産主義青年団書記処第一書記）の二人がいるが、いずれも最高指導者候補とは見做されていない。他には、諸葛宇傑（湖北省党委員会副書記）、時光輝（貴州省党委員会副書記）をはじめとして、省級党委員会の副書記や常務委員を務める者は増えてきたが、まだ有力候補は示されていない。

権力交代時期が流動的になつたことで、第七世代のキャリアの展望も不透明だ。また、彼らは今の指導部のメンバー以上に習近平との直接的な交流は少ないと思われる。習近平が次の世代の若手幹部を信頼できるのか、彼らとどのような関係性を築くのかは不明である。こうした若手幹部のキャリアの不透明性も長期的なリスクの一つであろう。

おわりに

本稿では、習近平の人脈を概観し、その多様性と質的变化を分析した。その上で、今後を展望し、習近平が抱える問題についても論じた。

習近平の人脈は、紅二代（劉源、張又俠など）、陝西省関係者（王岐山など）、清華大学関係者（陳希など）、河北省関係者（栗戰書など）、福建省関係者（蔡奇、何立峰、王小洪など）、浙江省関係者（李強、陳敏爾など）、上海市関係者（丁薛祥など）、旧南京軍区関係者（何衛東、苗華など）の八つの系統から構成されることを示した。第一期政権では、劉源や王岐山など、古い友人が権力基盤の強化に貢献した。それと並行して、福建省、浙江省、上海市時代の部下の昇進も進められ、二〇一七年の党大会における大量抜擢につながった。二〇二二年の党大会では、それまで習近平政権を支えた同世代の友人たちが引退し、第三期ではかつての部下が習近平を支える中心的勢力となっている。同時に、これまで直接的な交流の多くないいわゆる外様も多く登用するようになっていく。

エリート政治の観点から、習近平政権が抱えるリスクは以下のように整理できる。まず、政策過程における習近平個人の役割は大きくなっており、イエスマンに囲まれた場合、諫言をする者がおらず、政策硬直化リスクがこれまで以上に高まる可能性がある。しかし、この問題については、習近平とその部下たちの実際の関係性を知る必要があることに留意しなければならない。習近平勢力の内部分裂のリスクも重要である。習近平の追従者同士が忠誠合戦を展開し、対立を強める可能性がある。あるいは、習近平とその追従者との関係が悪化し、対立に転じる可能性も考えられる。

習近平政権が第三期に入ったことで、これまで中国のエリート政治に定着してきたさまざまな慣習が放棄されつつある。権力交代の時期が流動的になったことで、習近平政権は後継者問題をはじめとするさまざまなリスクを抱えることとなった。

注

- (1) 中国共産党の派閥については、李昊『派閥の中国政治 毛沢東から習近平まで』名古屋大学出版会、二〇二三年も参照。
- (2) Hung-mao Tien, “Factional Politics in Kuomintang China, 1928-1937: An Interpretation,” in Gilbert Chan ed., *China at the Crossroads: Nationalists and Communists, 1927-1949*, Boulder: Westview Press, 1980, pp. 19-35 金以林『国民党高層の派系政治 蔣介石、最高領袖、地位的確立』修訂本、北京、社会科学文献出版社、二〇一六、八頁。
- (3) 坂尻信義「中国「ポスト胡」期待の二人 習近平氏と李克強氏」『朝日新聞』二〇〇七年一〇月二二日、「中国共産党人事 ポスト胡に「二頭の馬」 江派の影響力薄れる」『読売新聞』二〇〇七年一〇月二三日、大谷麻由美「中国共産党：ポスト胡氏、習氏が一歩リード」「太子党」「地方経験」背景に」『毎日新聞』二〇〇七年一〇月二三日。
- (4) Victor C. Shih, *Coalitions of the Weak: Elite Politics in China from Mao's Stratagem to the Rise of Xi*, New York: Cambridge University Press, 2022.
- (5) Jonathan Ansfield “Leader of China Aims at Military With Graft Case,” *New York Times*, 31 March 2014 (<https://www.nytimes.com/2014/04/01/world/asia/chinese-military-general-charged-in-graft-inquiry.html>).
- (6) Benjamin Kang Lim, Ben Blanchard “China's Xi likely to promote army general who exposed graft – sources,” Reuters, 1 August 2014 (<https://www.reuters.com/article/cnews-us-china-military-general-exclusive-idCAKBN0G144I20140801>).
- (7) 張又俠については、李昊「中国新指導部のプロフィール」⑦：張又俠 紅二代將軍」日本国際問題研究所、二〇一九年三月二〇日 (<https://www.jiia.or.jp/column/ChinaReport32.html>) も参照。
- (8) 「習近平憶挿隊：我把自己当做一個延安人」新華社、二〇一五年二月一四日 (http://www.xinhuanet.com/politics/2015-02/14/c_11114370816.htm)。
- (9) 「王岐山の知青歲月：与習近平友好 同蓋一床被子」鳳凰網、二〇一三年九月八日 (http://hb.ifeng.com/news/focus/detail_2013_09/08/1198995_2.shtml)。習近平自身も、王岐山のことをよく知っているると過去の回顧文で述べている。習近平「我是

- 黄土地的儿子』『西部大開発』二〇一二年第九期、一一二頁。
- (10) 任志强 (著名企業家) や海南航空関係者、董宏 (元中央巡視組副組長)、田惠宇 (招商銀行長) などがよく知られる。古谷浩一「ナンバー八はいま何を思う」『朝日新聞』二〇二〇年四月二二日、富名腰隆「大手行前頭取、規律違反か 中国、王岐山国家副主席の側近」『朝日新聞』二〇二〇年四月二三日。
- (11) 高新「至今仍未被外界關注的習近平政治親信王晨」自由亞洲電台、二〇一七年一〇月九日 (<https://www.rfa.org/mandarin/zhuannan/yehuzhongnanhai/gx-10092017125324.html>)。
- (12) 陳希については、李昊「中国新指導部のプロフィール」⑩：陳希「習近平の同室親友」日本国際問題研究所、二〇二〇年一月二二日 (<https://www.jia.or.jp/column/ChinaReport41.html>) を参照。
- (13) 「反腐風熾『之江新軍』崛起 習近平旧部同郷同学上位」『明報』二〇一五年一月一〇日、Jun Mai "Inside Xi Jinping's Inner Circle," *South China Morning Post*, 2 Mar, 2016 (<http://https://www.scmp.com/news/china/policies-politics/article/1919744/inside-xi-jinpings-inner-circle>)、情実優先「習閥」台頭」『読売新聞』二〇一七年九月三日。
- (14) 李昊「中国新指導部のプロフィール」①：栗戦書「大器晩成型のジェネラリスト」日本国際問題研究所、二〇一八年二月六日 (<https://www.jia.or.jp/column/ChinaReport07.html>)。
- (15) 「習近平体制の秘書役が就任 胡氏派・栗氏」『読売新聞』二〇一二年九月二日、成沢健一「中国：総書記側近に胡主席派 新指導部安定狙い」『毎日新聞』二〇一二年九月二日。
- (16) 王比学「全国人大常委会党组圍繞：歴史使命、歴史責任和我們的歷史担当；進行集体学習 栗戦書主持並講話」『人民日報』二〇一八年七月一八日。
- (17) 黄坤明については、李昊「中国新指導部のプロフィール」⑧：黄坤明「習近平の宣伝部長」日本国際問題研究所、二〇一九年七月一九日 (<https://www.jia.or.jp/column/ChinaReport39.html>) を参照。
- (18) 高新「何立峰大概率接班劉鶴」自由亞洲電台、二〇二一年五月三十一日 (<https://www.rfa.org/mandarin/zhuannan/yehuzhongnanhai/>)

- gx-05312021165854.html) 西山明宏「習氏経済ブレーン、側近に? 劉副首相が退任濃厚、後継に何立峰氏が浮上」『朝日新聞』二〇二二年一〇月一三日。
- (19) 厦門大学出身者が多く、メディアに「厦大閥」などと言われはじめている。紀曉華「中国観察…「厦大幫」掌中央財經弁」星島網、二〇二三年五月一九日 (<https://std.sheadline.com/sc/realtime/article/1926617/>) 即時・中國・中國觀察・厦大幫・掌中央財經弁)
- (20) 富名腰隆「トップ二五人、半数交代へ 習氏、司法・警察ポスト重視か」『朝日新聞』二〇二二年一〇月一五日。
- (21) 高田正幸「習氏が「最も信頼する男」、副首相級に 名声高めた「皇家一号事件」」朝日新聞デジタル、二〇二三年三月二二日 (<https://digital.asahi.com/articles/ASR3D458RR3CUHB100S.html>)。
- (22) 孟宏偉公安部副部長、孫力軍公安部副部長、傅政華前司法部長などが代表的である。高田正幸「中国、公安幹部ら肅清 体制引き締め活発 前司法相失脚」『朝日新聞』二〇二二年一〇月四日。
- (23) 後に書籍にまとめられた。習近平『之江新語』杭州、浙江人民出版社、二〇〇七年。
- (24) 朝日新聞中国総局「核心の中国 習近平はいかに権力掌握を進めたか」朝日新聞出版、二〇一八年、一二三―一二四頁。
- (25) ただし、『朝日新聞』によると、四月には一度更迭が決まりかけており、習近平がそれを止めたという。富名腰隆「失態「習派」、消えた更迭案」『朝日新聞』二〇二二年一〇月一八日。
- (26) 朝日新聞中国総局「核心の中国」九四―九七頁。
- (27) 浦松丈二「中国…「ポスト習」に陳氏内定 常務委入り、次世代筆頭」『毎日新聞』二〇一七年八月二八日。
- (28) 丁薛祥については、李昊「中国新指導部の、プロフィールング」⑥…丁薛祥 習近平の側近中の側近」日本国際問題研究所、二〇一八年一〇月二三日 (<https://www.jia.or.jp/column/ChinaReport27.html>) を参照。
- (29) 「習近平対推進中央和国家機関党的政治建設作出重要指示強調 帶頭維護党中央權威和集中統一領導 建設讓党中央放心、讓人民群眾滿意的模範機關」『人民日報』二〇一八年七月一三日、「帶頭維護党中央權威和集中統一領導 建設讓党中央放心、讓人民群眾滿意的模範機關」『人民日報』二〇一八年七月二三日。

- (30) 李昊 「中南海の二五人」 お友達人事録』『文藝春秋』二〇二二年一月号、一〇八一—二〇頁。
- (31) 韓正については、李昊 「中国新指導部のプロフィール」⑤：韓正 上海一筋四〇年から筆頭副総理へ」日本国際問題研究所、二〇一八年一〇月四日 (<https://www.jiia.or.jp/column/ChinaReport26.html>) を参照。
- (32) なお、各地域の党委員会書記が勤務地の軍の党委員会第一書記を兼任するのは一般的であるが、通常それは公式略歴には記載されていない。習近平のように、軍関係の兼任職を詳細に略歴に記載しているのは、他に類を見ない。
- (33) 倉重奈苗 「習主席、軍掌握へ本腰 福建省時代の人脈、中枢に登用」『朝日新聞』二〇一五年二月四日、西村大輔 「習氏、軍中枢権力固め 旧南京軍区関係、四人」『朝日新聞』二〇一七年一〇月八日。
- (34) 富名腰隆 「軍幹部、「台湾シフト」意識 中国共産党」『朝日新聞』二〇二二年一〇月二五日。
- (35) 李昊 「中国新指導部のプロフィール」④：趙楽際 反腐敗の新たな旗手」日本国際問題研究所、二〇一八年八月二日 (<https://www.jiia.or.jp/column/ChinaReport25.html>)、李昊 「中国新指導部のプロフィール」③：王滬寧 三代帝師」日本国際問題研究所、二〇一八年五月二三日 (<https://www.jiia.or.jp/column/ChinaReport24.html>)、李昊 「中国新指導部のプロフィール」⑨：李希 沿海諸省の要職を歴任する西北系幹部」日本国際問題研究所、二〇一九年八月二六日 (<https://www.jiia.or.jp/column/ChinaReport40.html>)。
- (36) Bob Davis and Lingling Wei “Meet Liu He, Xi Jinping’s Choice to Fix a Faltering Chinese Economy,” *Wall Street Journal*, 6 October 2013 (<https://www.wsj.com/articles/SB1000142405270230490670457911442566524958>).
- (37) 李成によると「習近平は北京八一中学と北京第二十五中学に通ったが、劉鶴は北京一〇一中学に通った」といふ。Cheng Li, *Chinese Politics in the Xi Jinping Era: Reassessing Collective Leadership*, Washington, D. C.: Brookings Institution Press, 2016, p. 321.
- (38) “Elder Liu He Remains China’s Economic Guide, Including on US Strategy,” *South China Morning Post*, 23 June 2023 (<https://www.scmp.com/news/china/diplomacy/article/3225060/elder-liu-he-remains-chinas-economic-guide-including-us-strategy>).

- (39) 矢板明夫『習近平 共産中国最弱の帝王』文藝春秋、二〇二二年。このような認識はジャーナリストや専門家に広く共有されていることを強調しておきたい。
- (40) 習近平「緊緊圍繞堅持和發展中國特色社會主義 學習宣傳貫徹黨的十八大精神」『習近平談治國理政』北京、外文出版社、二〇一四年、一六頁。
- (41) 習近平「把權力關進制度的籠子裏」『習近平談治國理政』三三八頁。
- (42) 李昊「習近平派一色の新指導部―最高指導部 政治局常務委員の顔ぶれ―」『外交』七六号、一六一―二〇頁。
- (43) 李昊「新型肺炎の流行と中国の政治経済への影響」日本国際問題研究所、二〇二〇年三月九日 (https://www.jia.or.jp/strategic_comment/no16.html)。
- (44) Julie Zhu, Yew Lun Tian and Engen Tham “How China’s New No.2 Hastened the End of Xi’s Zero-COVID Policy,” Reuters, 3 March 2023 (<https://www.reuters.com/world/china/how-chinas-new-no2-hastened-end-xis-zero-covid-policy-2023-03-03/>).
- (45) Lingling Wei “China’s Former Foreign Minister Ousted After Alleged Affair, Senior Officials Told,” Wall Street Journal, 19 September 2023 (<https://www.wsj.com/world/china/chinas-ex-foreign-minister-ousted-after-alleged-affair-senior-officials-told-fd4672>), “Chinese defence minister under investigation for corrupt procurement,” Reuters, 16 September 2023 (<https://www.reuters.com/world/china/us-diplomat-questions-whether-chinese-defence-minister-under-house-arrest-2023-09-15/>).
- (46) 呉国光も同様に見方を示している。Guoguang Wu “New Faces of Leaders, New Factional Dynamics: CCP Leadership Politics Following the 20th Party Congress,” *China Leadership Monitor*, Issue 74, 2022 (<https://www.prcleader.org/post/new-faces-new-factional-dynamics-ccp-leadership-politics-following-the-20th-party-congress>).
- (47) この世代という考え方は鄧小平が取り入れたもので、自らの指導権を正当化するためにも、党主席をも務めた華国鋒を過渡的人物として世代に数えなかった。鄧小平「組成一個實行改革的有希望的領導集體」『鄧小平文選』第三卷、北京、人民出版社、一九九四年、二九八―二九九頁。

※注において引用したウェブ記事はいずれも二〇二三年一月一五日最終アクセス。

※本稿の記述は部分的に李昊「習近平の人脈と第二十回党大会の注目人物」日本国際問題研究所、二〇二三年二月八日 (<https://www.jiia.or.jp/research-report/china-fy2021-06.html>) で示したアイデアにもとづいている。

※本稿は日本学術振興会科学研究費（課題番号：18H03626）の研究成果である。

Xi Jinping's Personal Connections

Hao LI

This article focuses on the personal connections that support the Xi Jinping administration and examines who have supported Xi Jinping in his power consolidation process. It then discusses the ongoing transformation of Xi's power base from the first to the third administration, and points out that this transformation could be a risk to the Xi Jinping administration. Specifically, this article shows that Xi Jinping's personal connections consist of eight different groups: Red Second Generation, Shaanxi Province, Tsinghua University, Hebei Province, Fujian Province, Zhejiang Province, Shanghai City, and former Nanjing military district. This article then points out that from the first to the third administrations, the core of Xi's personal connections has gradually shifted from old friends to former subordinates. This article also point out that in terms of personal connections, the Xi Jinping administration faces risks related to policy rigidity, internal divisions, and succession issues.

Keywords : Xi Jinping, faction, personal connections, Fujian, Zhejiang

キーワード : 習近平、派閥、人脈、福建、浙江